

庄を本貫とすると考えられる糸田貞義などは、所領内外の武士を被官化して地頭代官として扱い領国化を進め、在地有力武士と対立することにもなった。こうして、北条氏一門の独占的体制が九州のみならず、全国的に展開していったので、多くの有力御家人や在地領主との対立が次第に醸成され、反北条氏の気運がまんえんするようになったのである。

第二節 室町幕府の成立と九州の守護大名たち

南北朝期の内乱

足利尊氏が後醍醐天皇の呼びかけに応じて六波羅探題を滅ぼすと、九州では宇都宮高房（冬綱・守綱）らは鎮西探題を攻めて、博多において北条英時を滅ぼした。こうして鎌倉

幕府は、元弘三年（一三三三）に滅亡し、建武の新政が開始されたのである。ところが、幕府を滅ぼした多くの武士たちは天皇親政を望んでいたのではなかった。ただ執権北条氏の専制体制の打倒を考へてのことであつた。その上、新政府は幕府打倒を果たした武士層を軽視し、恩賞も公平に行わなかつたので、たちまち武士たちの不満を買い、初めからつまずいてしまった。こうした武士たちの動向を背景に、足利尊氏は新政に叛意を明らかにして、中先代の乱（建武二年一三三五）を鎮圧したのち鎌倉で挙兵して上京したが、かえつて新政府側の武將たちによつて敗戦を余儀なくされ、西国方面に逃れた。

この時、敗走した足利尊氏を九州へ迎え、室町幕府創設に卓越した功勞を果たした少弐頼尚は、筑前のほ

かに豊前・肥後の守護職をも兼帯し、九州統治の中心的存在となった。ところが、中央で南北朝の対立（二三六―九二）が生じ、また足利尊氏とその執事の高師直とが弟の足利直義と対立した、すなわち南北朝内乱期における幕府内部の対立である観応の擾乱（観応元年＝一三五〇―文和元年＝一三五二）が起り、幕府側・直義側・南朝側と三者のもつれた争乱状態が出現する。こうして、南北朝の内乱は地方も巻き込みながら複雑な状態が出現することになったのである。

少弐氏は足利尊氏が博多に残した鎮西管領の一色道猷と利害が対立・敵対することとなった。特に、足利直冬が高師直に追われて九州へ逃れると、足利直義と強く結びついていた少弐頼尚は足利直冬擁護の側にまわり、九州北部に優勢な地位を確立した。しかし、足利直義が鎌倉で殺されると足利直冬は九州を離れて山陰地方に移って南朝に降伏して西国を転々とし幕府軍と対立した。

一方、少弐頼尚は懐良親王・菊池武光方の南朝側に降り、足利尊氏に抵抗した。そのため、九州では南朝方が優勢となり、一色道猷・直氏父子は長門国へ逃走した。

このころ、宇都宮守綱は豊前守護に任ぜられていたが、懐良親王に屈して、わずか一年ほどでやめさせられた。少弐頼尚は南朝方から豊前守護を安堵あんどされていたが、その守護代として西郷顕景が活躍している。少弐頼尚は豊前国の莊園を侵略したと訴えられて豊前守護職を罷免され、代わって国司として五条良遠が入国し、守護代菊池武尚が執務した。

そこで少弐頼尚は足利義詮に帰順して、南朝側の懐良親王・菊池武光と筑後河畔大保原に戦って大敗し、西郷顕景ら多くの家来・一族が戦死して勢力を失い凋落ちようらくした。

九州探題今川了俊

一色直氏が去ったあと、鎮西管領となった斯波氏経・洪川義行は懐良親王の優勢を覆す力がなく九州を去った。今や全国的に退潮の趨勢すうせにあつた南朝側の勢力の中で、ただ九州の南朝勢力のみが健在で優勢を保っていた。応安三年（二三七〇）、今川了俊が九州探題となると、前二者の失敗をかんがみ、安芸・備後の守護職を得て、両国の武士を動員し、防長の大内氏の協力を得て九州に入る計画を立て、少弐氏の筑前国、大友氏の豊後国、島津氏の薩摩国を除く六か国の守護職推薦権をも得て、子息義範を豊後に派遣し、弟仲秋を肥前に、弟氏兼を豊前の野仲氏の城へ送り、自らは中国勢を率いて筑前に入り、大宰府の懐良親王を包囲する作戦をとった。懐良親王は大宰府を退いた。

北部九州の支配の安定を図る絶好の機が肥後水島の戦いと判断した今川了俊は、その陣中において、少弐冬資を暗殺したため、かえって島津氏・大友氏の怒りを買ひ、計画は挫折した。

このあと、今川了俊は大内義弘の協力を得て態勢を立て直して、南朝側の勢力を九州からほぼ一掃すると突然、幕府から探題職を解任された。

大内氏の豊前 今川了俊の九州経略に大いに貢献した大内義弘には、その報酬として了俊の弟氏兼に与え、**の国人被官化** していた豊前守護職が与えられた。以来、一七〇余年も、大内氏は守護として豊前に君臨し、

巧みに領国化した。この背景には、九州探題に今川了俊の後に任命された洪川氏が了俊ほどの政治力を持っていなかったため、幕府は大内氏に頼ったからである。

大内義弘は二五年ほど豊前の守護であったが、豊前の武士を被官化し、豊前国を領国化するには至らなかつた。弟の盛見は義弘の留守を預かつて幕府が支援する大内弘茂や介入道・道通を破って幕府を譲歩させ、豊

前国守護職をも回復した。

大内盛見は三〇年近くも在京して將軍に近侍したが、守護代杉重綱を通して、豊前の寺社本所領を保護し、荒廢した宇佐宮など国内の社寺を再興することに努めた。その事業に豊前の武士を動員し、協力させることよって、大内氏の膝下に組み入れながら、守護代―郡代―地下代官という支配組織を整備していった。このようにして豊前の国人を被官化し、支配組織の役人に起用した。また、寺社本所領の多くに半済はんぞうを実施して、守護請を行った。国人などの被官をその代官に任命し、武家領は直轄地としてたり被官の知行地として、守護領国化を一層進めた。

しかし、大内盛見は、公方御料国となった筑前国の代官に任ぜられてからは、年貢や段銭の徴収を強行して、筑前国に所領をもつ少弐氏や大友氏の領地を侵害した。また、国人の所領をも侵害するところがあつたので惣国一揆を惹起じやうきし、また大友氏などにも挑ひかまれたうえ、筑前国怡いと土郡深江の地に孤立して、あつけなく自刃した。

幕府の守護大名 この後、大友持直が豊前・筑前を占領し、幕府に敵対した。大内家では盛見の跡を義弘への政治工作 の子持世に継がせることになつた。ところが、これに不満をもつ持盛は、大友持直の支

援を受けてクーデターを起こして持世を石見国へ走らせ、防長を手に入れた。ところが幕府の支援を受けた持世は、石見・安芸の軍勢とともに山口に侵入し、持盛を豊前に敗走させ、幕府は大友持直から豊後の守護職を奪つて、持直と対立していた大友親綱に与え、筑後の守護職を菊池氏に与えて大友持直を討伐させようとした。大友持直は大内持世ら幕府軍を豊後姫岳（白杵・津久見市境）の狭い谷間に誘い込んで奇襲し、伊予

の守護河野通久を戦死させる大勝を収めたが、その後の長期籠城に疲れ、没落行方不明となった。

大内持世は少弐氏をも滅ぼして、豊前・筑前の守護職をも回復し、公方義教に近侍したが、赤松満祐邸で義教とともに非業の死を遂げた（嘉吉の乱、嘉吉元年＝一四四二）。大内持世のあとを継いだ大内教弘は上洛をせず、ただひたすら領国統治に力を注ぎ、「大内家壁書」を作るなど、他の守護大名にさきがけて戦国大名への道を行んだ。

応仁の乱と大内氏の滅亡 応仁の乱（応仁元年＝一四六七）が起こると、管領細川勝元と対立していた大内政弘は、山名宗全に招かれて、中国・四国・九州の兵二万五〇〇〇余を率いて上洛し、西軍を優勢に

導いた。劣勢となった細川勝元方は、大内教幸入道道頓に周防・長門の守護職を与えて、安芸・備後を攻めさせ、豊前の守護職を大友親繁に与え、筑前の守護職を少弐頼忠に与えて、大内政弘の足元を揺すぶった。細川勝元・山名宗全の両雄が相次いで死去したあと、公方義政と大内政弘の和睦が成立し、豊前・筑前の守護職が大内政弘に還補されると、政弘は抵抗する大内道頓や少弐頼忠をしりぞけて豊前・筑前の地の支配を安定させた。

公方義材と対立する管領細川政元は、周防へ逃亡した義材の上洛を阻止するため、大友親治・少弐政資に命じて豊前・筑前を侵略させた。

大友親治は、兄政親を下関の船木地蔵院で殺害されたことで、大内義興を恨んでいたから、豊前に侵入し大内氏と激しい攻防を繰り返した。中でも文亀元年（一五〇二）には、馬ヶ岳を囲んで数万の軍勢が対峙する大合戦があった。その後、京都では、細川高国が実権を握り、公方義材を迎えたので、大友親治もこれを

認め、大内義興は義材を奉じて上洛し、管領代として、約一〇年間、天下を牛耳った。そのころ、豊前の武士は、大内氏や守護代杉氏の被官となって山口に祇候し、その領国支配に服し、大内氏の氏寺である氷上山ひのみやま興隆寺の二月会大頭役を城井氏や山田氏がくじ引きによって勤め、仲津郡や築城郡などが脇頭役を命ぜられた。

大内義隆は、その初政において大友義鑑と対立し、豊前・筑前で衝突したが、公方義晴あうせいの斡旋で和睦してからは友好関係を一四年間ほど維持した。

大内義隆が家老陶隆房や杉重矩らと疎隔を生じ、反逆されて滅びると、陶隆房は大友宗麟の弟晴英はるひさを大内家督として迎え、大内義長と称させた。四年後、陶隆房は毛利元就によって、厳島で滅ぼされ、その一年半後大内義長も、毛利元就と大友宗麟の密約によって、下関で滅び去った。

第三節 北部九州の戦国大名の興亡

大友宗麟と北部九州経略 大友宗麟は、弟の大内義長が生存中は遠慮して豊前に侵入しなかった。その間、秋月文種・宗像氏貞らは、旧主少弐氏を再興させると称して一揆し、大内義長に抗し、田川郡から

仲津郡馬ヶ岳に進出した。大友宗麟は大内義長が自刃すると、直ちに豊前・筑前の両国に兵を進め、上毛郡の山田隆朝を防長へ亡命させ、秋月文種を自害させて豊前・筑前を掌中に収めた。しかし、防長を手中にし